

日本郭沫若研究会事務局

二〇〇八年一月九日発行

郭沫若研究會報

第十号 (総No.11)

## 目次

日本郭沫若研究会事務局

二〇〇八年一月九日発行

〒八六二一八六八〇熊本市大江二一五一

熊本学園大学外国語学部岩佐研究室気付

電話〇九六一三六四一七〇九八（直通）

FAX〇九六一三七二一〇七〇二一

### 【文学探訪（特別寄稿）】

博多を訪ねて・・・・・・・・・・・・・・・・・・蔡震作／小崎太一訳

### 【思い出のあれこれ】

医師岡田靖雄先生が語る郭沫若の思い出・・・・・・・・藤田梨那

郭沫若先生の肉声を聴いた・・・・・・・・堤清行

### 【交流の広場】

楽山郭沫若学会参加記

岩佐昌暲

### 【名作翻訳】

「死の誘惑」他四編・・・・・・・・武継平訳

郭沫若研究関連ニュース・著書受贈・新入会員の紹介その他

編集後記・・・・・・・・事務局

## 博多を訪ねて

蔡震作 / 小崎太一訳

中国人で博多を知っている人は多分多くないだろう。何故なら日本の地図には、あの日本海に面した街を福岡と記し、そしてそこは日本九州地区最大の街だからだ。しかし私は博多に対して別に素知らぬ感じはない。何故ならそこから、そして博多湾から、近代中国文壇の著名な詩人郭沫若が現われたからだ。彼の詩や文を通して、私は早くから博多の多くの風物景観・民俗民情・歴史遺跡を知っていた。初冬の日、ある学術活動に参加したことにより、私は実際に印象の中の博多を訪ね、落ち着いて感じる事ができた。

行く前に私は、私に学術活動への参加を要請した岩佐昌璋先生に、郭沫若の当時の活動に関する場所を見てみたいと伝えていた。そして岩佐先生は親切にも、私のために周到なスケジュールを組んでくれた。宿に落ち着いてすぐ、彼は私に付き添って九州大学に行った。郭沫若は当時この大学の医学部に留学していた。キャンパス内には現代的な教室楼や研究所・実験室・図書館・九州地区で最もよい附属医院などが密集していた……それらは予想していたものだった。この日本で最も早く建てられた国立大学の一つである大学は、もう一

世紀の歴史を経ている。当時校舎にかぶさる様に映えていた十里の松原はすでに見られず、ただ校門だけがわずかに古びた様子だ。郭沫若が住んでいた近くの網屋町は、ただバス停の標識にのみ跡を残している。私が期待していたあのような感覚をまだ感じられるのだろうか？

福岡は当然ながら早くから現代化した大都市になっているが、密集したビルと車の途切れることのない街の喧噪の中で、私が本の上では熟知していた東公園の日蓮和尚の銅像や箱崎神社前の巨大な鳥井・箱崎の海辺のあの岩で築かれた灯籠、称名寺の繁茂する木立を一つ一つ探し求めた時、私はほんの少し満足し、歴史の濃い霧の中で深く陶醉した。西公園の最も高い場所から博多湾を見下ろすと、遠くにうつすらと見えるあの小島は志賀島だろう！島からは「漢倭奴国王」の印文が刻まれた金印が出土しており、郭沫若も文章中で言及しているが、それが記録しているのは二千年前のある歴史だ。事実上博多地区は古代、中日間を往来する通路だった。郭沫若は安価な住所を求め、博多の近くの唐津に行ったことがあるが、名称からそこが古来中日間の往來の港だったことが知られる。博多で発掘された鴻臚館遺跡は、奈良時代に唐朝の使節を迎え、日本の遣唐使が足を休めたホテルだった。この毎年の祭りで飾り立てられる獅子や山車も、中国の民間の獅子や竜を踊らせる習俗と非常に似通う点がある。

太宰府天満宮は博多の有名な観光地で、そこで祀られてい

るのは学問の神である菅原道真だ。大きな試験や進級試験の時にはいつも、多くの生徒がここに来て神の加護を願う。大学受験の前には、日本全国各地からの生徒さえもが父母の付き添いでここに来てお祈りする。本殿の背後の長々とした木製の板に「絵馬」の木札がぎっしりと掛けられていて、それぞれの札には皆祈りの言葉が書かれている。私に付き添って見学している鳥谷さんは博士論文を終えたばかりで、硬貨を何枚か投じて願いの一つ、論文がちゃんと通過するようにと祈った。彼女は大学受験の時にここで祈りの儀式を行い、九州大学合格を願う木札を書いたが、結果は願いの通りとなり、それで彼女はこのような祈りを信じていた。私は鳥谷さんに尋ねた、「もし生徒たちは受からなくても、まだ信じるのかい？」彼女は言う、「太宰府で祈ることも含め、自分が力を尽くせば、主観的に可能な努力を果したことになる。もし願い通りにならなくても、そういう運命だったというだけで済む。こうして私は日本人の、神社に行けばいつもおみくじを引いたり願いをかけたがるやり方を、すこし理解することができた。彼らはやはり自らの不断の努力に頼っており、神の加護を祈るのも努力の一つなのだ。自らの力の及ぶ全てのことを成し終えた時、結果として願いが叶おうが叶うまいが、心に恥ずべきものはないのだ。

天満宮本殿の建築形式は典型的な日本の神社建築で、全て天然の木材で建てられており、正面は突き出て弧を描く頂きのある前廊を入り口にし、大きな屋根は分厚く何層もの草で覆われて出来ている。それは日本民族の人と自然の関係のあ

る理念を暗示しているようだ、何故なら日本の神社に奉られている神はそのほとんどが自然神だからだ。天満宮の本殿は朱色に柱を塗り、金を貼って軒を飾っており、このような色彩は、ほとんどが天然木材本来の色で保たれている、日本各地の数え切れぬほどの神社の中では、めったに見られないものだ。心字池に架かっている三つのつながった橋も赤く、過去・現在・未来を表している。ここは人に希望を与える場所なのだ。

八十年余り前、二人の中国人学生・郭沫若と田漢が、早春の風が和やかで日の麗しい日に一緒に太宰府に来たのは、しかし願い事のためではなかった。彼らは境内の梅の木の下を通り抜け、感慨激しく未来を憧れていた。一人が殿前の青銅の麒麟を撫でながら「私は麒麟を悲しむ孔丘だ」と言えば、一人は青銅の牛に乗り「私は『道德経』五千言を書き、獅子のように吠えたい」と言った。人はすでに亡く、銅牛はしかしそのまま存在する。殿前の左右二株の古梅は、白い花を咲かすのが飛梅といい、赤い花を咲かすのが皇后梅で、花の季節ではなかったのだが、それでも古梅の生い茂る生命力が見てとれた。後ろの庭園は一面の梅林で、左の山の五、六千株もの梅とつながっている。花の咲く頃は本当に一面の花の海となり、太宰府特産の梅が枝餅さえも梅の花の枝で飾られている。それは菅原道真が失意の時に、ある老婆がいつも持ってきて彼に食べさせ慰めていたもので、病を取り去り災難を消すことができのだそうだ。当時郭沫若はこの一面の梅の花の香りの中に酔い倒れたのだろう、彼はどの梅の木の下であの、梅

の花の木の下の醉歌」を詠ったのだろうか？

博多で最も魅力的なのは当然博多湾のあの大海だ。箱崎の海辺は港と高速道路にもう占拠されてしまっている。少し遠い今津に海を見に行くことにした。郭沫若は当時そこへ赴き、有名な歴史遺跡「元寇防塁」を見て、「今津紀遊」を書いた。

地下鉄に乗り今宿駅で降り、勝福寺を通ったので、あのロマンチックな伝説を帯び、郭沫若に詩意を沸き立たせた蟠竜古松を見に行った。松はまだあったが、残念にも蟠竜の様だった巨大な枝はもう見られなかった。寺を出て先に進んで曲がると、うねうねと終わりの見えない「生の松原」へと入った。九州大学ではもう見るできない「十里松原」は、多分この様なものだったのだろう。地面は積もった落ち松葉に覆われており、上を歩くと松の香にとけ込む様な感覚だった。松原の中の海に近い方に、地面に現われた岩が帯状になり海岸と平行に遠くへ伸びているのがはつきりと見えた。これが「元寇防塁」で、長い年月により、すでに土砂に覆われてしまっている。当時、郭沫若の先生の一人、考古学を非常に愛した中山先生がこの歴史遺跡の発掘を行い、その中の一段数百メートルの堀の両側を深く掘り、土砂を清掃し、人々に防塁の原貌を見せた。防塁とは一列の防御用の石堀で、私たちの長城と似ているが、規模は全く小さいものだ。しかし遠くから石材を海辺に運びこの防塁を築いたのは、やはり規模の巨大な工事なのだ！

防塁をとおり抜けて数十メートルで、碧藍の博多湾が目の

前に現われた。驚いたことに街の左側のこの海は、全くある種の自然状態で、これが郭沫若の詩句に現われた、あの一面の変幻無限の深き青なのだ。

砂浜から湾内の能古島・志賀島を望むと、緑の屏風が立ち上がったかのように。潮がゆつくりと海辺にわき上がり、柔らかに真白な砂浜を舐めている。後の左右からは松の波の音が耳に絶え間なく届き、さらに遠くには何艘かの船があり、見え隠れする輪郭がまるで郭沫若の詩の中の点在する白い帆になり……私に付いてきた小崎君がもう帰ろうと後ろで叫んでいた、夕方の講演会のためだ。だが私は人影のない海辺を離れたくはなかった。かつて見知っていた何かを、まだつかまえていないような気がずつとして。

突然、「今津紀遊」の一節の文字が頭に浮かび、私は自分がいる場所が大体、郭沫若が当年ここに来た時に立った位置だと気付いた。「防塁の前は海、防塁の後ろは松林で、小鳥が松林の中で鳴いている。海風は爽やかだ。右手には獅子のあたまのように突き出した高い峰があり、木々は青々としている。」湾の水の色は清い碧で、かすかに波がある。志賀島が北に横たわり、海の中道一帯の白い砂浜が、はつきりと見て取れる。西北にも二つの小島があるが、名前は知らない。湾の左右には抱きかかえるように岩の岸があり、右の岸は平に削られ衝立てのようで、左には山脈が起こっている。真北の湾の口には海の霧が朦々として、その中に帆影がある……「私はこの発見のために興奮してしまい、しばらくの間、時空がまるで八十年余り前の博多湾のほとりに戻ったかのようにだ

った。この様な感覚は本当に不思議だった。私は突然、あの本来ならば一日中人体解剖やホルマリンと関係していた医学部の学生が、何の由縁か詩興が沸き立ちとうとう一人の詩人になってしまったのか、理解できた。大海、夕陽、松林、愛情、ロマンティックな伝説、古戦場の遺跡、この様なある種詩意に富んだ生活環境に身を置けば、詩の衝動が生まれずには済まされないのだ。博多湾の大海、博多地方の自然風物と人文景觀が、青年郭沫若の生活詩への覚醒と理解を育み刺激し、そして彼に必要だったのはある種大海のように力強く奔放で、とらわれるもののない詩の形式だった。だから彼は感情を込めて書いた。「私は博多湾の明るい波を忘れられない、私は志賀島上の夕陽を忘れられない。私は十里松原ののどかさを忘れられない。」これは私のたくさんの思索のゆりかご、これはわたしのたくさんの詩の産床。」

博多湾が一人の新しい詩人の誕生を促したのだ。北京に戻る前に、九州大学がしばらくしたら移転すると聞いた。新しい発展には新しくさらに広い空間が必要だ。しかし何故だろう、私のように関係のない外部の者がこのことに残念さをほんの少し感じるのは、このとつくに鉄筋コンクリートの現代建築に覆われているキャンパス内にも、そこそこに灰色レンガの小さな建物が残っていて、汚れて崩れかけた古い塀が保存されており、所々に枝が入り組んでいる古木があるのは、やはり当時の十里松原が残した松の古木なのだ。それらは一世紀もの歴史変遷を受け止め、その中に一人の中国人青年の詩意に満ちた足跡と激情をこだましているのだ。

それらが後の人々に残したのは味わい尽くせない思念と追憶だ。この一切がキャンパスの移転に伴い、段々と消え去ってしまわないことを祈るのみだ。

博多での数日は曇ったり晴れたりだったのだが、かんかん照りであろうとしとしと降りであろうと、郭沫若の当時の足跡の及んだ場所を、博多で一ヶ所ごとに巡っていた時、私は歴史が波の様にこだますのがずっと聞こえていたように感じていた。それらはみな九州大学キャンパス内に散在していたあれらの遺跡と同じく、歴史と現代を結んでいるだけでなく、中日両国のはるか昔から絶え間なく続き、必ず絶え間なく続いていく文化往来をも繋いでいるのだ。

(二〇〇六年十一月、福岡―北京)

#### 【思い出のあれこれ】

医師岡田靖雄先生が語る郭沫若の思い出

藤田梨那

岡田靖雄先生は精神科医である。東京大学医学部で脳解剖学及び医学史の小川鼎三先生に師事され、卒業後医師になられた。以来数十年間、精神科の臨床に取り組むとともに精神科医療史を研究してきた。医学研究の傍ら、歌を詠み、歌人でもあった精神科医斎藤茂吉の伝記も書いている。岡田先生



はまた郭沫若と縁のある方である。

ある知人の紹介で、私は岡田先生を尋ねることができた。先生の書齋は東京都杉並区のとある静かな住宅地にある。玄関に入ると、「青柿舎」とはいた青い柿の静物画が目飛び込んだ。由来を伺うと、青くさいといわれるから青人と号している。青柿は渋くて食えないが柿渋は防腐剤になる。青柿はまた精史（精神科医療史）に通じるので、「青柿舎」と屋号をつけられたそうである。

書齋の入り口に大きな額が掛かっている。近づいて見ようとすると、先生はにこにこしながらおっしゃった。「これが、郭沫若先生が下さった手紙です。とうとう額に入れました。」と。早速郭沫若と出会った経緯を伺うと、先生は一九五五年東大医学部を出た頃の話が始めた。医学界の人物の名前や医学用語が次々に出てきて、畑違いの私の頭を忙しく掻き回した。

岡田先生が郭沫若に出会ったのは一九五五年であった。その年十二月、郭沫若を団長とする「中華人民共和国訪日科学代表团」が戦後初めて日本を訪問した。当時岡田先生は東大医学部を卒業して、インターン生であった。では、インターン生がどうして郭沫若に出会うことができたか。そもそも一九五五年頃はまだ日中国交がなかった時期で、「中華人民共和国訪日科学代表团」の訪日は、日本の民間団体、特に日本学術会議の努力によって実現したことである。民間団体の中に民主主義科学者協会の名もあった。当時岡田先生は日本の研究団体「条件反射研究会」の事務局長をしておられ、事務

局の置かれていた法政大学教授柘植秀臣生物学研究室によく出入りしていた。研究と学会事務などの面で、柘植氏と密接な関係があった。一方、柘植氏は民主主義科学者協会の幹事長をしていて、ソ連、中国との学術交流に熱心に努力していた。郭沫若一行の来日の際、柘植氏も受け入れや接待で尽力した一人であった。一九五五年十二月七日に、日本側八団体による「中華人民共和国訪日科学代表团」歓迎レセプションが東京大塚の茗溪会館で催された。その八団体には民主主義科学者協会も入っていた。岡田先生は柘植氏の推薦で歓迎レセプションに出席した。ちなみに、当時通訳として随行した劉徳有氏が九十年代に出版した『郭沫若日本の旅』にもこの日の歓迎会の回想が見られ、柘植秀臣氏の名前が挙げられている。岡田先生はその席上で初めて郭沫若、馮乃超、翦伯贊、薛愚等と会ったわけである。郭沫若の様子について、岡田先生は「郭さんはおおらかで、日本語で私は郭と申しますと自己紹介し、中国語でスピーチをした。」と回想した。その日の午後には分科会があつて、医学関係では、中国科学院生理化学研究所長馮徳培氏との懇談が行われた。その時、ソ連の条件反射研究の専門雑誌「イ・ペ・パヴロフ記念高次神経活動雑誌」はずでに中国で全訳されているのを知って大変うらやましいと感じられたとか。会が終わって、岡田先生は会に出席した仲間と熱く語り合った。「きょう得た中で一番いいのは、医学研究の現状を知ったことよりも、あの人たちに人間的な親しみを感じたことだね。郭沫若先生も馮先生もいい人だな」と。この感想には戦争に対する日本人の負い目が隠

されていた。「八年間日本軍に踏みにじられてきた戦勝国の人たちというおごりはまったくなく、恩仇を超えて再会した同胞」のような感動を受けた。この日の分科会のことは、劉徳有氏の『郭沫若日本の旅』にない記述であるので、当時の様子を知らるためには重要なものであろう。

中国代表团が帰国する前に盛大なお別れパーティが開かれた。そのとき岡田先生は郭沫若の名による招待状を受け取った。十二月二十一日のお別れパーティで再度郭沫若と会った。このパーティについて、岡田先生は特に興味深く記憶していることが二つあるという。一つは席上日中友好協会会長松本治一郎氏が「今日は日中兩國結婚の前祝い、このつぎこんな会をする時は国交回復のお祝いだ。」と発言したのを受けて、郭沫若はすかさず「松本先生が言われた結婚からかわい玉のような子供が生まれるでしょう。東亜のために乾杯！」と乾杯を促した。もう一つは盛りそばの話である。茅誠司氏は郭沫若が盛りそばが好きで、五杯食べたことがあると言つと、郭沫若は「日本の料理で好きなのは盛りそば、次はサザエのつぼ焼き、でもそれより好きなのがあります。それは、街の焼き鳥です。ここで提案があります。茅先生、松本先生、松村先生、南原先生、この宴会が終わったら焼き鳥を食べに出ませんか？」と雰囲気盛り上げた。このハプニングを思い出して、「日本側でしゃべったのはいずれもご老体で、郭先生よりはずつと話したでした。腹だけでなく心も満たされた私は、たいへん楽しくて、“日本の若者のひとりとして”と挨拶に立ちたい気持ちを抑えきれないほどでした。」と、当時

の感動を述べている。

さて翌一九五六年、岡田先生は北京に行く柘植氏に前年の感動とお礼を書いた手紙を郭沫若に届けてくれるよう託した。その中に自ら翻訳したソ連の文献「あたらしい精神病理学の芽生え」を同封した。これに対して、まもなく郭沫若から直筆の返事が届いた。原文は…

岡田靖雄様

御手紙及び「あたらしい精神病理学の芽生え」、柘植教授から受け取りました。ありがとうございます！

美しい情誼に充滿してゐる御手紙に感動しました。中日兩國の関係は一日も早く結婚するような段階に達するようにお祈りします。

論文集は専門の人達に読ませませう。

郭沫若

一九五六・四・十

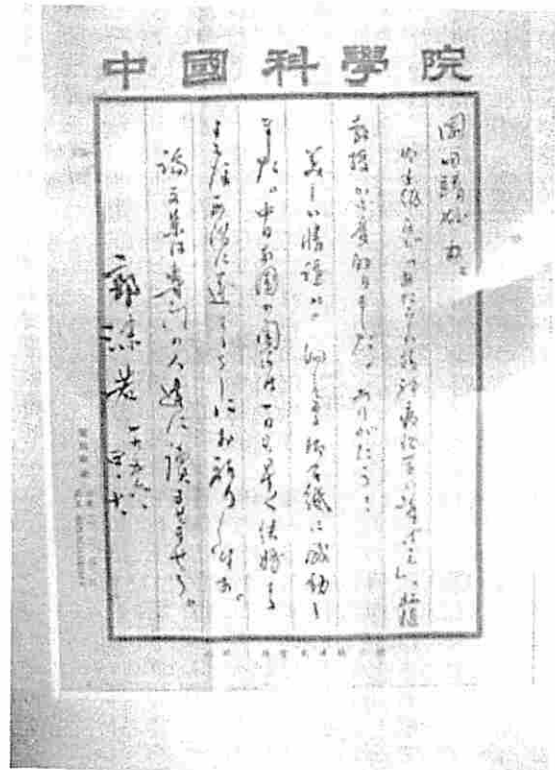
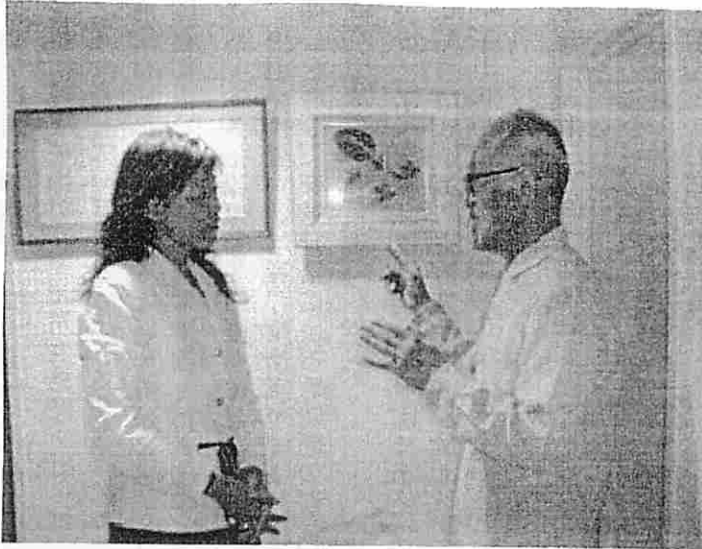
岡田先生はこの手紙を受け取って大変感動されたそうである。「あのような偉い方から直直返事を頂けるとは思いもよらなかった。これは我が家の家宝です」と語る。この手紙はいま先生の書齋の入り口を飾っている。五十一年前の手紙であるが、中国科学院の赤罫の便箋に毛筆で書かれた文字ははつきりと読み取れる。写真を撮ってもいいですか、と私が訪ねると、先生は「どうぞ、どうぞ。」といわれた。お蔭で半世紀前に残された先人の遺筆を一つ見ることができた。



岡田先生は、一九七八年郭沫若が亡くなった時追悼文を発表した。「追悼 郭沫若先生——中国・日本の結婚をねがっていた人——」と題する文章である。文中に初めて一九五六年郭沫若から届いたこの手紙を紹介した。

私は岡田先生の書庫を二時間ほどで辞したが、話は半世紀にも及んで、入り組んだ経緯、人間関係、感動的な思い出など、私たちは歴史の追憶と感動に浸って、時間の過ぎるのも忘れるほどであった。

二〇〇七年七月八日



郭沫若先生の肉声を聴いた

堤 清行

今年の日中国交正常化三十五周年にあたる。これを記念して佐賀地区日中友好協会では、第三回郭沫若フォーラムを九月三十日に開催することになった。佐賀県は、郭沫若が医学から文学への道に進んだその時に、古湯、熊の川温泉に家族とともに滞在し、作品を執筆したゆかりの土地である。

第一回実行委員会の席で、私は五十二年前の学生時代、母校九大を訪れ講演された郭沫若先生を思い出していた。

「え！直接聴いたのですか。どんな雰囲気だったのですか？」  
たちまち私は質問攻めに逢った。一九五五年といえれば国はまだ国連加盟ならず、お隣の中国とは人的にも物的にも交流は少なく、社会主義の新生中国とはどんな国か、対日観はどうか、中国を代表する学者、政治家の先輩の講演は、若者たちの関心呼び、交通延滞による数時間の遅れにも拘わらず、満員の会場は熱気に溢れていた。

幸いというか、当時私は大学ノートに日記をつけていた。拙文でお恥ずかしいが、法学部に進学したばかりの二十歳の一学生の当日の感激を汲み取ってもらえればと思う。

一九五五年（昭和三十年）の日記より

十二月十七日（土）晴

朝憲法を読む。午後の汽車で行くつもりだったが、それが五十分も延着して往生した。

やっと吉塚で降りて急ぎ医学部講堂に行った時には満員。中国学術視察団長・中国学術会議議長、九大先輩の郭沫若氏の講演会である。

定刻の二時三十分は、まだ前の会場西南大学（一般人対象）へも到着していないそうだった。終わる予定の四時三十分になんと到着。それまで、始め文学部目加田教授の郭沫若先生という題の紹介。その後郭沫若氏の恩師小野田元教授の思い出話。しばらくして具島法学部長の例によって声を変え、身

振り交えての巧みな演説。四時三十分には超満員、ひっきりなしにマイクが前へ詰めると叫んでいた。恐ろしく多くの学生が来たものだ。

式は菊池前学長の開会の辞、山田学長の挨拶、操医学部長の紹介に続いて郭氏が、若い通訳を従えて登壇。まず、「自分は大正七年から暫く、この医学部で学んだ。ここでは私はそんなに良い学生ではなかった。そして文学運動に走り、不勉強と耳の悪いので、医者になることを断念した。しかし、この大学で、私は多くの良いことを学んだ。祖国を愛し、人類を愛し、平和を愛し、真理を愛するということ。こういう大切なことを学んだ。もしこの学校の方針が当時と変わらなものであれば、諸君は大変幸福だ。」ということ。この話が一番強調された。

それから、中国は十六ナントカ（面積の単位らしいが分からない）の耕地を持つているが、その内十三は未開のままであり、六億の民衆は一丸となつてその開発に努めており、それは着々と進行している。黄河は後二年で治水工事を終わるとかい話。そしてこれらのために、我々は日本の技術・機械を必要としており、それをお借りしたい。その代わりに我々も何かを提供することが出来る。いろいろの科学を公開し合いたいし、教授の交換もしたい。それに中国政府は大賛成で援助を惜しまぬし、お国の政府もそれほど妨害はされないでしょうとは、痛烈な皮肉だった。皆どつとわいた。一時間余りの演説が済み、拍手の中に先ほどの小野田教授を三十二年ぶりの再会にも拘わらず見つけて、抱き上げておられた。感



た。ここで午前の部が終わり昼食。中共樂山市宣伝部の招待宴だった。

午後は二つのグループ十二の発表があった。午前中の発表をゆったりやりすぎた影響で、午後の発表は時間の制限がきつく、窮屈な運営だった。最初のグループは蔡震（中国郭沫若研究会副会長）、武継平（上海財經大学教授）の司会による発表。日本郭沫若研究会のメンバーは全員このグループで発表した。発表題目だけ書いておく。

大高順雄「郭沫若所訳的我黙・伽亜漢・魯拜集」

小崎太一「郭沫若抗戰時期戯曲創作与日本之關係」

張忠任「關於郭沫若的留日初期史實的幾項考証」

中村俊也「回省之中的郭沫若」

岩佐昌暉「从《炉中煤》想到的幾件事」

第二グループは王保生（《文学評論》副編集長）、李曉紅（北京郭沫若記念館研究員）の司会。私はやや疲れて、休憩コーナーでコーヒーを飲み、発表はまじめに聞いていない。

五時に夕食。その後バスに分乗して樂山大仏を見物した。郭沫若学会の事務局もここにあったという。その後「沫若郷梓風情」と題する文芸晚会。これは樂山師範學院の学生による歌舞や合唱からなり、なかなか見ごたえがあった。

帰ってから日本組（藤田、小崎、武、張、岩佐）だけで、一階のバーで飲む。われわれ以外に客はなく、服務員は迷惑顔だった。大会事務局からビール差し入れ。小崎君が気を利かせて、服務員にはチップを渡したようだ。十二時前解散。

七月二四日（火）

大会第二日目である。午前は二グループ。最初は魏建（山東師範大学文学院教授）、謝昭新（安徽師範大学文学院院長）両教授が司会。この組では講評のさいに塗鴻（四川民族学院教授）という若い研究者の発表に関して司会の魏建教授が、実証性に欠けるといふ意味のかなり辛らつな批判をおこなった。これは中国の学会ではやや異例のことではないか。塗鴻はかなり面子を傷つけられたようで、この夜の小組討論で荒れ、討論はやや異様な雰囲気になった。小崎会員の話だと、昼間の沙湾の宴会でかなり飲んだらしい。

第二グループは王錦厚（四川郭沫若研究会執行会長）、金宏宇（武漢大学文学院教授）が司会した。王会長のまともは資料重視を強調したもので、この学会を通じて資料重視の主張が一種の潮流になっていることを感じた。

午後は沙湾の郭沫若故居の参観。これは今回の会議の目玉ともいふべき行事だった。沙湾に行く前に樂山師範学院図書館を参観した。われわれの参観に合わせて「沫若文化史料民間收藏展」というものが開かれており、樂山の民間蔵書家の集めた郭沫若関係の書籍、雑誌などが展示されていた。資料は同時に即売もされ、購入する研究者もいた。図書館では郭沫若関係資料がデータベース化されていて、私も検索してみたが、多くの資料の全文が検索でき、かなりの労力と資力が投じられていると感じた。樂山師範学院は郭沫若研究を学校の特長として売り出す戦略をもっているであろう。

参観が終わって、いよいよ沙湾に向かう。パトカーが先導

し、四台のバスが猛スピードで走る。十四年前に来たときに比べ、変化が大きい。特に沙湾の郭沫若故居は、まだ解放前の面影を残す石畳の狭い通りに面していて、タクシーを乗り入れることなどできなかったが、今は通りは拡幅され、往時の趣きは無い。バスを近くに停め、ぞろぞろと郭沫若故居に向かう。だんだん記憶が蘇ってくる。故居の裏が庭園で、その奥に郭沫若記念館がある。記念館には前回とは本当に何もなかったが、今回は少し展示物が増えている。といつても主に姉妹都市の千葉市川市からの贈り物や、市川市との交流の記録写真などでたいしたものはない。

その後、近くの会館で沙湾党委員会主催の宴会があつた。宴会の後、公園で休み、その後、再び猛烈なスピードで楽山のホテルに帰った。先導車に乗っていたのは当地の公安局長ということだった。こういう待遇は、会議の参加者への敬意ではなく、今回郭沫若記念館館長をはじめ、郭家の面々が来ていたことへの配慮であろう。

夜、小組討論があり、私は第一組（総論、生平研究、史料研究）に参加した。始まってすぐ塗鴻が立ち上がって暗に魏建らを批判する演説を始めたが、直ちに蔡震らから返り討ちにあつた。事柄は、郭沫若の入党をめぐる事実関係に関する討論のようだったが、実際は午前中の討議で面子をつぶされたことへの腹いせだということが明らかで、余り気分がよくないやりとりだった。最後は、郭沫若研究をまとめた書物の出版計画の話になり、表面的にはおだやかに討論が終わつた。

七月二五日（水）晴れ

最終日。八時三〇分から昨夜の小組討論の紹介があり、九時三〇分から最後のグループの発表があつた。司会は王曉霞（楽山社会科学連合会副主席）、胡明（『文学評論』副主編）で十一時まで二人が発表した。

最後に章玉鈞中国郭沫若研究会副会長（元四川省政治協商会議副主席）が総括報告をおこなつた。こういう場合の例にもれず、各方面に配慮したまことに周到な総括だった。それによれば参加者は八〇余名、そのうち外国からの参加者は日本、韓国、ドイツの四カ国から十一人ということだった。提出された論文は六〇余編（A四で三四一頁の予稿集が作成、配布された。）章氏の指摘で注目したのはやはり史料の発掘、重視が今回の特色だったということ、氏は同時に日本郭沫若研究会の発表が基本的に緻密な実証主義だったことを挙げて、「そういう学術的風格はわれわれに深い印象を残した」と賞賛した。もちろんお世辞ではあるが、やはり日本グループの発表の特色をよくつかんだ感想だったと思う。

このたびは、楽山の街を散策することもなく、会場のホテルで郭沫若研究と向き合う三日間だったが、私にとつてはそれはそれで久しぶりに脳を活性化させることのできた、充実した時間であつた。

（〇七年十一月二五日）

【名作鑑賞】

郭沫若原作  
武継平試訳

『死の誘惑』

ぼくのナイフは

窓辺に倚ってぼくに微笑む。

彼女は笑いながらぼくに言う、

沫若、くよくよすることはないわ！

早くおいで、わたしにキスしなさい、

あなたの悩みを取り除いてあげるわ。

窓の外の青い海も

絶えずぼくに声をかけている。

彼女はぼくに叫んでいる、

沫若、くよくよすることはないわ！

早くおいで、わたしの胸に抱かれなさい、

あなたの悩みを取り除いてあげるから。

『新月と晴海（『三葉集』）』

息子は新月を見る。

遥かなる空を指しながら、

わが子の魂が飛んでいき、

月のみやこで遊んでいるのを知る。

息子は晴海を見る、

息子は海のうなり声を真似する。

わが子の心が舞い上がり、

血潮が海の満ち引きを共にするのを知る。

『天の狗』

オレは天の狗だ！

月を呑み込み、

太陽を呑み込み、

星という星を呑み込んでしまい、

宇宙のすべてを呑み込んでしまった。

オレはオレになった！

オレは月の光だ、

オレは太陽の光だ、

オレは星という星の光だ、

オレはX光線の光だ、

オレは全宇宙のエネルギーの総量だ！

オレは疾走する、

オレは絶叫する！

オレは燃焼する！

オレは烈火のように燃える！

オレは大海原のように吼える！



オレは電気のように走る！

オレは走る、

オレは走る、

オレは走る、

オレは自分の皮を剥ぐ、

オレは自分の肉を食らう、

オレは自分の血を啜る、

オレは自分の心臓を齧る、

オレは自分の神経の上を疾走する、

オレは自分の脊髄の上を疾走する、

オレは自分の脳髓の上を疾走する、

オレはオレだよ。

オレのなかのオレは爆発しそうだ！

### 『天上の市街』

遙か遠い街の灯がついた、

数え切れぬ閃く明るい星のように。

空に明るい星が現われた、

数切れぬ光る街灯のように。

あの彼方にかすむ空には、

きつと美しい街があるにちがいない。

街に並べたものも、

きつとこの世の中になく珍しいものにちがいない。

ほら、あの浅い天の川、

きつと限りなく幅広いにちがいない。

兩岸に阻まれた織り姫と牽牛は

きつと牛に乗って再会するに違いない。

ふたりは今頃、

きつと天上の市街を漫遊しているに違いない。

信じないなら、あの流れ星を見てごらん。

あれは、提灯を持って歩いてる彼らふたりではないか！

### 『大鷲』

シベリアの大鷲！

お前は体が鷲鳥より大きいが痩せている。

巨大な鉄条網の檻に身を囚われて、

檻の中には一匹のウサギと、二羽の飼い鳩がいる！

シベリアの大鷲！

くちばしは銅の如き、爪は鉄鉤の如く。

鋭い目でソラを見つめ

翼をばたばたと羽ばたいて怒鳴る。

シベリアの大鷲！

お前はウサギを捕らえず、飼い鳩をも襲撃しない……！



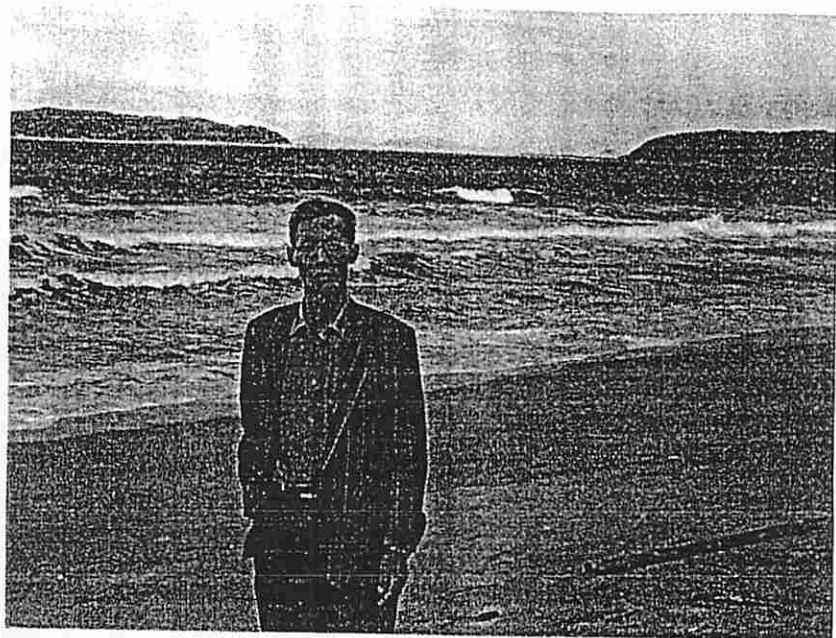
【郭沫若研究関連ニュース】

1、蔡震中国郭沫若学会副会长九州訪問

二〇〇六年十一月二四日夕刻、日本現代中国学会西日本部会、日本郭沫若研究会、九州日中関係史学会の三組織の共催で、「郭沫若と博多」と題する講演会が、福岡市天神の西日本新聞会館十四F第三会議室で開催された。これは日本郭沫若研究会の受け入れで学術交流のため訪日した中国郭沫若学会副会長、北京郭沫若記念館副館長の蔡震氏が九州を来訪した機会に開催したものである。蔡震氏は、郭沫若文学の原点が博多にあり、博多湾の自然が文学者郭沫若を生んだことを多くの作品を挙げながら力説し、当日集まった三十名余の聴衆に感銘を与えた。講演会終了後、二十名近くが氏を囲んで近くの中華料理店で懇親会をもった。蔡震氏はまた岩佐会長の案内で九州大学医学部および箱崎キャンパスを訪問、わずかに残る松原や、箱崎宮、東公園、西公園、称名寺、大宰府、熊の川温泉など、郭沫若関連の場所を訪問し、多くの収穫を得て福岡国際空港から帰国した。

2、フォーラム「人間郭沫若の歩いた道」開催される

佐賀地区日中友好協会では、日中国交正常化三十五周年



(蔡震氏・博多湾にて)

を記念して郭沫若の足跡を辿るフォーラムを開催した。フォーラムは二〇〇七年九月三十日午後から、佐賀市東与賀「ふれあい館」で開催され、西日本新聞社、佐賀市教育委員会などが後援した。当日は第一部がフォーラム「人間郭沫若の歩

いた道」で、鹿毛隆郎九州日中関係学会会長（西日本新聞元北京支局長）の司会で、藤田梨那本会副会長と岩佐昌暉会長がそれぞれ講演をおこなった。第二部は「藤田梨那さんを囲んで」の座談会で、佐賀地区の日中友好活動に熱心な人たち五十人余が集まった。

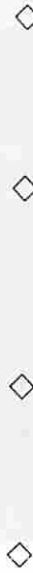
### 3、九州大学医学部に郭沫若顕彰碑

前九州大学総長・杉岡洋一先生によれば、九州大学医学部キャンパス構内に卒業生・郭沫若を顕彰する碑の建造する計画が、医学部昭和三三年卒業生の記念行事として進行中だという。杉岡前総長は郭沫若来訪の折、医学部学生であったが、歓迎委員会の一員として郭沫若九大来訪の準備に当たった方である。今回の計画が実現すれば、郭沫若の業績への一般の関心も高まることが予想され、本研究会が今年九月に予定している、郭沫若九大入学九十周年記念国際シンポジウム（仮称）にとってもはずみとなる。

### 4、郭沫若九大入学九十周年記念国際シンポジウム開催計画

今年九月は郭沫若が九州帝国大学医学部に入学してちょうど九十周年になる。本研究会事務局では、これを記念して本年九月に九州大学医学部において、中国郭沫若学会と合同の国際学術研討会を開催する計画である。この計画については詳細は決定していないが、経費面で昨年の楽山学会の際に蔡震副会長らと、中国側の参加者は基本的に自費来日するなど

の点で大筋の了解がついている。また大会の顔といふべき主席には杉岡洋一前九州大学総長に打診中で、いい感触を得ている。国際会議を開催するとなると、さまざまな経費がかかる。それがどれだけになり、どうして調達するかなどの検討がこれから必要になる。会員諸氏に相談できる計画をできるだけはやく策定したいと思っている。その際はご協力をおねがいしたい。



【資料紹介】

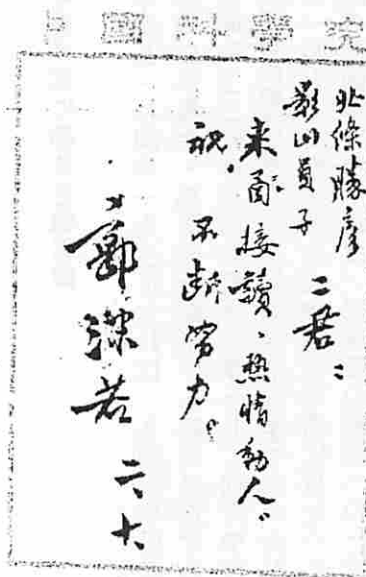
静岡県掛川市の日中友好協会の鈴木嘉弘さんという方から、郭沫若が静岡の高校生に送った手紙のコピーが送られてきた。鈴木さんは一九五六年当時静岡県富士高校で教鞭をとっておられた方である。この手紙の由来については、鈴木さんから手紙に詳しいので、お許しを得て関係箇所を紹介する。

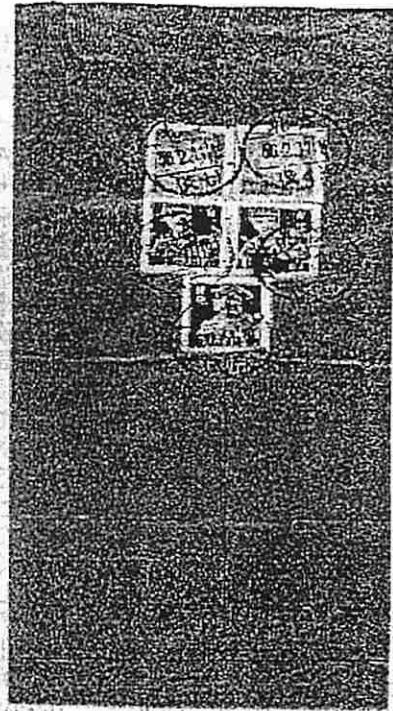
「同封のものは一九五六年（SS1）郭沫若から来た手紙のコピーです。前年の三〇年に久しぶりの来日、早大で講演会を持った時、日本の学生諸君手紙をください、と言ったのを受けて小生が授業で話し、それに応じて送った二人の高校二年生への返事です。

本当に返事を下さるのかと疑心暗鬼でしたが、二人は大喜び、書道の先生もすぐ墨のにおいをかいだりして感動したものでした。結局二人宛を半分にするわけにも行かず、今のよう

コピーもできない時代でしたので、小生が預かり、そのままになってきているものです。

十数年前に北京の郭沫若記念館を訪問、このコピーを差し上げましたら、その当時のことを調べて下さいましたが、こちらからの手紙やそのことを記録したものは見つからなかったとのことでした。





小生は学生時代、内山書店で「郭沫若文学」を入手、学生会誌に一、二翻訳・紹介（二人の勇士、孔子粥にありつく）

したりしておりましたので、生徒にも「新中国」のことをいろいろ話しておりました。（以下略）

手紙は北京五六年二月十一日の消印がある。短いものだが、当時の日本の雰囲気を考えると、この手紙を受け取った高校生がいかにか感激したか想像に難くない。高校生の手紙にきちんと返書をした郭沫若にも新しい時代の日本を背負う若者への期待があつたであろう。ここに紹介し、貴重な資料をご提供いただいた鈴木嘉弘さんに心からお礼申し上げます。

◇ ◇ ◇  
【著書受贈】

篠原茂隆著『魯迅と郭沫若——大正期の日本に始まる文学』二〇〇六年六月刊、私家版。著者の篠原さんは本会員。一九三三年遼寧省生まれ。九州大学法学部卒業後、長く三菱重工に勤務した。退職後、下関私立大学大学院に学んだ。本書はそのときの修士論文を下敷きにしたもので、B5版一八六頁。郭沫若を論じた部分が全体の半分を占める。郭沫若の各時期の主要文学作品を精読、要約してこれを論じ、多くの参考文献を渉猟してその裏付けとしている、著者は謙遜しているが、郭沫若論の力作だと思う。（いわさ）

【新入会員の紹介】（入会順）

岸陽子（早稲田大学名誉教授）

坂井洋史（一橋大学教授）

堤清行（佐賀県日中友好協会会長）

◇ ◇ ◇ ◇ ◇  
【編集後記】

二〇〇七年本研究会にもいろいろなことがあった。まず、研究会組織体制の本格化。以前の研究会代表が会長に呼び方が変わり、そして関東地区にも副会長を置くようになった。もう一つの出来事は事務局長であるわたくしの上海赴任だった。国際大都会である上海は、福岡とは目と鼻の先だが、国外だから様々な予測できぬ不便さがある。

進んだIT手段のおかげで、上海で編集され、東京で印刷、郵送されたこの研究会報第十号（総十一号）は、やっと皆さまの手元にお届けすることができた。思っていたより原稿が集まらなかったのも、わたくしの幼稚な翻訳で補うことにした。今号は特別寄稿として中国郭沫若研究会蔡震副会長のエッセー『博多を訪ねて』を掲載した。博多という町が、中国入学者の目にどんなふう映っているのか、それを知る読みごたえのある一編である。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇  
中国では、旧正月（西暦二月七日）が新しい一年の訪れを意味する。旧暦でいう「丁亥年」は一月中旬の今日になってはまだ終わっていない。こう思うと、「間に合ってよかった」とほっとした。今年是一本でもいい、何とかして年内に発行できるように努力はしたものの、掲載予定の原稿は集まらず今日に至ったのである。みんなは忙しいという。原稿を集められない編集長は失格である。

そういうわたくしも今号の執筆をしなかった。一つ書こうと思っていたが、十七年ぶりに帰国したあと、祖国の変貌に慣れるのに必死だったので余裕がなかった。

中国人はほんとうに極端なことを好むらしい。ちよつと前までは教授は「優秀教師」のように上司や同僚の好感度で点数をつけて「選出」されるものだったが、今は毎年、国家教育部指定の「核心期刊物（CSSCI）」に学術論文を少なくとも一本発表しなければならぬ。研究業績が足りないと、本俸を上回る「教授職手当て」が二割減給されてしまう。日本は大学人でも年功序列だから特に努力しなくても一定の年数が経てば教授にはなれると聞いたが、今の中国の大学に比べると、プレッシャが少なく居心地がいいかもしれない。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇  
今年の高君宇関係の翻訳と、郭沫若、郁達夫および田漢関係の論文を二本書いた。二本とも社会科学学院系統の学術誌に掲載してもらった。CSSCI誌なので、面子だけは一応保てた。

（武継平）